

## 語學史上に於けるルターをめぐる諸問題

荒 木 泰

現在所謂標準ドイツ語として通用している言語（新高ドイツ語 *Neuhochdeutsch*）の成立に關しては、かのマルチン・ルターを以てその創始者とするというのが、一般の漠然とした常識となつてゐる。まことに世界史上稀に見る一大劃期を作り上げた程の大人物にあつては、一箇の言語を「創造」することすら、さして困難の事ではないかの如くに思わせるこの常識は、何等疑うべき餘地のない事實であつたらうか。或は後世の言語學者達の倦まざる攻究の結果、正當な科學的根據を以て證明された種類のものであるか、それとも偉大なる人物に往々附隨し勝ちな「神話」がこゝにも造られたのであらうか。確かにより深く考へるならば、多くの資料を探索するまでもなく、各々生れつき異つた方言の中に育つて來た幾千萬の人々に、一個人が——たとへ如何なる天才であらうとも——彼等すべての則るべき一つの言語を示して、これが直ちに普及徹底されるということは、それ程容易に行われ得ることとは思へないであらう。事實ルター以前に於て、權勢を誇つた神聖ローマ帝國の皇帝すら、統一ドイツ語を企てて猶且及ばなかつたのを見れば、ドイツ國內にも多くの敵を持つたルターの場合、反對者の悉くを併呑して舊教徒の圈内深くまで己の言語に従わしめるといふことが、如何にして可能となつたのであらうか。

又、假りにルターをして眞實「現代ドイツ文語の創造者」「ドイツ語の父」といふ名を冠するに相應しいものとし

ても、それには多くの條件が附加されねばならず、或る幾つかの限定の下に於てであることは餘りにも明らかである。語學史上に於けるルターの位置を明かにしようとするならば、此等の點の解明が先決問題であり、この小稿の意圖する所も亦そこにある。然し乍ら烏滯がましくも「解明」を掲げることは出来ぬ限り、こゝで能う限りのものは唯問題の提出に過ぎなす。

ドイツ最大の言語學者ヤコブ・グリム (Jacob Grimm) が、ルターの言語こそ新高ドイツ語の中核であり、その根底を礎いたものとする見解であつたことから、この考え方は一時殆んど信仰的命題でさえあつた。然るにその後種々の疑問が提出され始め、ルターと新高ドイツ語との關連が更めて検討されるようになった。先づ、シェーラー (Wilhelm Scherer) の著名なドイツ文學史に於て、言語的文學的根據からルター時代と新高ドイツ語時代との間に明確な一線ありとし、延いてはルターが舊世代、即ち中世と、文學的のみならず言語的にもある種の特質を共有している事實を強調して、ルターが果して新高ドイツ語の時代に屬すべき人物であるかどうか、という疑問を提出した。この思ひ切つた論斷は當然大きな反響を喚起したが、數十年後神學者トレルチ (Ernst Troeltsch) は、精神的に考量する時、ルターは寧ろ中世に屬すべきものであるとなし、ルターの精神思想内容には新時代の特徴たる諸様相が全然認められぬとする程に、彼の内的な中世の本質を展開して見せた。

われわれはこゝでルターの内的生活を分析する餘裕を持たないが、シェーラーの云うルターの言語に於ける中世的特質とは一體如何なるものを指しているかを考えてみようと思う。そのために、ルター出現以前のドイツ語の状況を概観してみることとする。

神聖ローマ帝國の成立以來、ドイツ諸侯國の間に統一下ドイツ語への意欲が兆し始めたことは自然の成行であつたといえようが、從來諸官廳に於いては、すべての文書・記録がラテン語で書かれて充分用を足していたことを思い合

せるならば、官廳がドイツ語を用いねばならなくなつた時代の背景の中にも注目すべきものがある。即ちルネサンスの方漸く一般民衆の間に人文的教養が浸透し始めたことも、重要な因子の一つとして採り上げらるべきであらう。王侯・貴族・僧侶の特権であつた「読み・書き」が漸次民衆のものとなり、爲政者の側にも民衆の言葉、即ちドイツ語を採用することを餘儀なくされたと考えられる。時期的には十三世紀末より公文書に於いて次第に多くドイツ語が用いられ始め、十四世紀には遂にラテン語の文書を凌駕するに至つた。然し乍ら、これは素より一つのドイツ語と言ひ得べきものではなく、諸侯が各々割據する地方の方言を基にして作られた地方文語に過ぎない。王侯間の往來交渉が頻繁となるにつれて、共通した官用語が當然要望されることとなつた。當時（十四世紀後半）帝位を持つていたルクセンブルク王家が、かくて共通ドイツ語への趨向の中心となり、折しも東部植民地經營のため必要に迫られたことも手傳つて、こゝに中部ドイツ地方の方言を基とした帝室官用語が作り上げられた。これが諸王侯の做う所となつて統一ドイツ語への機運は頓に高まり、次いでハプスブルク王家に帝位が移るや、マキシミアン一世（1493～1519在位）の如き、極めて熱心な皇帝もあつて、「共通ドイツ語」なる名を冠せられる一つの用語が形成された。かくて可成りの廣さに効力範圍を有する様になつた官用語が存在していたにもかゝらず、猶且これが統一ドイツ語の規範とはなり得なかつた事實に就いては、種々の原因も考えられようが、官用語が讀むことと書くこと、即ち視覺に訴える面のみに偏し作られた結果、ラテン語臭を拂色し切れぬ生硬な語彙と文體を持つていたことも、急激に民衆の間に溶け込むに相應しくないものであつたと思われる。

この隘路に大きな救いを齎し、帝室官用語の普及と發展を一層強力に推し進めたものは、グーテンベルクによる印刷術の發明であつた。

この印刷術出現の意義は、動もすれば一般文化史的の面のみに強調され勝ちであるが、統一ドイツ語の成立のため

にこの發明が果した役割は極めて大きいものがある。印刷物の讀まれる範圍は素より同時代に於てすら寫字文書に比して遙かに宏大であり得るのみならず、幾世代の後までも文字と文章を傳える機能を持つことは見逃し得ない。これこそ一つの言語統一のために不可欠な武器であつたといえよう。これなくしては、ルターの翻譯聖書と雖も、あれ程の普及力を持ち得なかつたことは明らかである。

既に下ナウ周邊地區の諸王侯の官廳は、その用語をプラーグの帝室官用語に接近せしむべく努力して來たが、それに留らず、同地區の印刷業者達も亦、帝室官用語の規範に倣つて追々地方色を除き始め、更には北獨・中獨に及んでパーゼル・シュトラスブルク等當時出版文化の中心地の業者及びマイニンツ・ウォルムス・フランクフルトの出版物も、時には原作者の意に背いてまで共通ドイツ語に加擔した。蓋し印刷物があらゆる地方に廣く讀まれるために業者が結束したのは尤ものことと首肯される。當時この共通ドイツ語で印刷出版された書物としては“Edelstein” Ulrich Boners 1461; “Ackermann aus Boehmen” Johann von Tepl; Aesop 1471 及び“一四六一—一五一八年間に現れたルター以前の十四種の翻譯聖書等があるが、これ等の原作が果してどの程度共通ドイツ語に忠實であつたかは極めて疑しいとされている。ルター自身、一五二〇年代の半ば過ぎまで、その著作の印刷に際して校正をなさなかつた。ルター著作を扱つていたヴァイテンベルクの或る業者などは、ザクセン侯官用語の一層正確な適用に關しては寧ろルターに先んじていたといわれる。又、ハンス・ザクスの草稿も、ニルンベルクの地方文語で書かれてあり、印刷された著作よりも實際はもつと古めかしい文體であつたという。つまり「作者でなく、印刷者が言葉を作つた」という傾向が到る處に見られるのである。

これ等の印刷語なるものが、共通語に及した影響は如何にも大きいものがあるが、それでも一七世紀に到つて尙地方色が完全に拂色されていたとは云い難い事實は、印刷語と活字の力文では未だ決定的なものとなるに足りなかつた

ことを物語つてゐる。

印刷業者達が自らの商品の販路を確保せんがために、期せずして言語統一に一役を擔つたと軌を同じくして、こゝに今一つ商業的利害關係から言語統一の動きに加わつた一團がある。當時漸く隆昌を見たハンザ諸都市では、相互間の頻繁な交通が、ある區域にあつては文語のみならず口語に於ても方言的相違を克服すべく餘儀なくさせたが、殊に諸外國との取引の必要上、商業語としての文語の統一が促進されるに到つた。然し乍らこれとても、折しもの新大陸發見に伴う結果としてハンザ同盟そのものが没落の道を辿るようになっては、この折角の機運も運命を共にせざるを得なかつた。

かく見て來ると、中世以來着々築かれて來た官用語も、又近世初期に起つた印刷語、商業語という新勢力も、結局は言語統一のための下地を作つたに留まることにはなるが、ルターを既に存在していた此等の機運から切離して考へることは不可能である。ルターの生地はザクセンのマイセン地方であつたが、このザクセンの選帝侯は共通ドイツ語の育成に極めて熱心な協力者であつた。ザクセンの言語が中部ドイツ語であるにも拘らず、侯は下部ドイツ語色の濃いハプスブルク帝室官用語に自らの官用語を近づけるべく努力した。大學でのドイツ語による講義は一五二六年バーゼル大學に於て、バラケルスス (Paracelsus) が初めて行つたとされているが、ルターが講座を持つたヴァイテンベルク大學では、講義は知らず、大學公用語としてはザクセン侯の官用語を用いて居つた。ルターは生地中部ドイツ語、精確にはマイセン語の他に、上部ドイツ語的なザクセン官用語、更に大學所在地に近い低地ドイツ語のいづれをも解したことは、言語統一者として絶好の條件を備えていたともいえる。ルターの用いた言語が如何なる要素から成つてゐるかという問題に際しては、その音韻や文法の形態に關する限りは、主として在來の帝室官用語に則つてゐると見られるべき節が多いが、一方單語に關しては、彼の異常な精力と才能を傾けてドイツ諸方言の中に生きてゐる言葉

丹念に厳選して採集したとされている以上、彼の環境の地理的有利な點も看過され難い。

音聲、變化、造語、構文の規範は従つてルターに依つて完成されたものでなく、況して創造されたものではない。ルター自身、「或る特定の、獨特な言語を持つてゐるわけではなく、南獨人にも北獨人にも理解される共通的なドイツ語を用いてゐるのである。」と云つてゐる如く、ルターによつて全く新しいドイツ語が生れたのではないことは確かである。

こゝで遡つて先に觸れた、ルターに於ける言語の中世的特質について再び考を巡らすならば、個々の言語學的又は音聲學的な資料を列擧するまでもなく、一つの結論を導き出すことが出来るであらう。即ち、若しルターの言語に中世的特質ありとすれば、とりも直さず、ルターの依據した官用語に轉嫁されるべきであるという所に歸結される。又翻つて中世的という概念の中から、所謂中世高ドイツ語と呼ばれるもののみを抽出して考察するならば、ルターの言語中に近世的な繋りを感じさせるものが、殆んど發見されないとしても、それと同程度に、中世語の中にルター的なものが如何に發見し難いかを認めねばならぬであらう。若し然りとすれば、ルターは近世からも中世からも離れた孤島の如き存在でなければならぬ。然るに中世語なるものの本質を觀察する時、これが決してドイツ全般に行われた統一的言語ではなく、主として宮廷の騎士文學に用いられた一文學用語乃至は文學的方言であり、一時代の部分的な言語に過ぎない。その意味に於ては中世語はルター乃至近世語とは縁が薄く、又他面、中世以來の官用語の中に中世語がこれら騎士文學語と何等かの繋りを持つて傳承されて來たとすれば、ルターも亦中世語後繼者の一人であることは否めない。これ等が今後の問題とされるべき點であらう。

次にその出現が同時に新しい統一ドイツ語の誕生であつたとまで云われたルターの翻譯聖書に眼を轉じよう。最初の獨譯聖書は一四六一年ルターに先んじること半世紀餘りの時既にメンテル (Joh. Mentel) によつて完成され、そ

の後ルター聖書の出版迄に高ドイツ語で十四冊、低ドイツ語で四冊もの翻譯聖書が印刷出版されているのを見ても、單に聖書の翻譯と云ふことのみが、ルター言語の急速な普及の原因ではないことが知られる。こゝには彼の宗教改革の偉業は勿論としても、聖書翻譯に際して用ゐられた流麗にして魅惑的な文體、自ら溢れて人を打たずには居れぬ生々とした用語が多分に成功の一因を成していることであろう。ルター以前に現れた聖書には原典の誤解も數多く、法皇制定のラテン語譯聖書に餘りに忠實であり過ぎたための難解箇所が少くない。いわばドイツ語らしからぬ獨譯聖書でしかなかつた。こゝで兩者の一例をとつて比較してみると甚だ興味深し。

一四八三年のニルンベルク聖書 (Matth. 6, 26) “Seht an die voegel des hymels, wann sy seen noch scheyden nit noch sammeln in den kisten, vnd ewer hymilischer vater fueret sy”

ルター聖書 (右と同箇處)

Sehet die Voegel unter dem Himmel an!

Sie saehen nicht, sie ernten nicht,

Sie sammeln nicht in die Scheunen,

Und euer himmlischer Vater naehret sie doch!

ルターの聖書に用いた言葉が、如何に韻律の魔力を持つていたかを示すために、彼の教敵であるゲオルグ・ヴィツェル (Georg Witzel) が半ば不快げに、又半ば感歎して述べた言葉がよく引用される。即ちルターは「神聖なるべき言葉に必要以上に調子のよい卑俗なドイツ語を用いんとし」、「音の響きに從つて獨譯した。」同様にエラスムス・

ウオルフ (Erasmus Wolf) も「黄金の舌を持った滑かな蜜の言葉」に惑わされるなど警告している。かような恐るべき力を持った、言葉の泉としての聖書と相携えて、教會での説教、聖歌、更に勤行に用いる言葉などが、新教徒間にルター言語を急速に浸透させたことは想像に難くない。そのみならず、カトリックの翻譯者達すらルターの翻譯に典據せざるを得なくなる有様であつた。

然し乍ら新舊兩教徒の分布を、ルター言語の勢力分布と比較する時、奇妙な現象が認められる。ルター派新教が中獨から北獨にかけて勢力を占めていたにも不拘、ルターのドイツ語の普及は寧ろ中南獨の方が先んじた。

この原因として考えられることは、元來ルターの言語なるものが、先述の如く多分にザクセン官用語に依存して居り、従つて中・高ドイツ語的色彩の濃いものであつたことが第一に擧げられる。それと共に、北獨の言語、即ち低地ドイツ語なるものの特異性をも充分顧慮せねばならない。即ち低地ドイツ地方の邊境的位置が、中・南獨とは異つた独自の文化形態を發展させるに到り、他地方で流通し始めたルターのドイツ語と並行して、獨立した文語を形成してしまつた。低獨人のルター新教への歸依も、ルター聖書を熱心に低ドイツ語譯する結果となつては、ルターの言語もこゝでは全く宗教から分離されてしまつた。このあたりの事情からしても、ルター聖書の普及即統一ドイツ語の醸成とは單純に判斷し切れぬ何物かを含んで居ることを示して居り、未だ開拓の餘地を残す、問題の領域であらう。

最後に、宗教的教化とは異つた面での「教育」活動も統一ドイツ語への一翼を擔うものとして無視され得ない。一五七八年、クライウス (Johannes Claius) の著した文法書 (Grammatica Germanicae linguae, ex bibliis Lutheri Germanicis et aliis eius libris collecta) はルター言語を文法的に組織づけ、これが各學校に採用されるに到つて、ルターの言語は漸く標準語としての地歩を固めることとなつたと見られる。

以上概観し來つた如く、近世高地ドイツ語の成立のためには、ルターを中心となしつゝ、而も時にはルターの出現



さへ單なる偶然的な契機となすかの如き複雑極まる諸、の條件と環境が相互に作用し合つて、問題を更に錯綜させているのである。ルターの語學史上に於ける位置を、より正確に規定しようとするならば、更に進んでルターの後繼者となり、新高ドイツ語の完成の貢獻した次代の文學者達に觀察を移して行かねばならない。唯こゝでルターに關してのみ云うとすれば、ルターの言語がオピッツ (Opitz)―ヴィーラント (Wieland)―レッシング (Lessing)―ゲーテ・シラーと次々に受け繼がれ遂に今日のドイツ語に迄完成されたということ自體、ルターの言語に於ける文學性、或は文學に於ける可能性を、我々に認識せしめる結果となるということである。